

東北地方の甘藷栽培史(4)

元鹿児島県農業試験場大隅支場長 中馬 克己

前号までの項目

はじめに

第1章 東北地方への伝播

第2章 江戸時代

1. 政治経済・農業情勢・世相

2. 各県の甘藷栽培

気象条件／品種／育苗の方法／整地及び肥料／植付けの方法、管理作業／収穫及び貯蔵、利用及び食生活

第3章 明治から大正時代

1. 政治経済・農業情勢・世相

2. 各県の甘藷生産状況の推移

3. 各県の甘藷栽培

品種／育苗の方法／整地及び肥料／植付けの方法、管理作業／収穫及び貯蔵、利用及び食生活

第4章 昭和初期から終戦（昭和20年）時代

第5章 昭和20年（戦後）から40年時代

第6章 昭和40年代後半から60年時代

（第4、5、6各章の項目は第3章と同じ）

第7章 平成初年から16年時代

1. 政治経済・農業情勢・世相

長期停滞を脱し、平成15年（2003）度の経済成長率は3%を上回り、失業率は13年ぶりに前年から低下した。平成16年（2004）度においても、企業部門は改善の動きが広が

るなど、景気に前向きの方が働いている。わが国の食糧自給率は、長期的に低下傾向で推移しており、昭和40年（1965）度の73%から平成14年（2002）度には40%まで低下し、主要先進国の中では最低の水準となっている。

わが国の食生活は、穀類を多く摂取するアジア諸国と、油脂類を多く摂取する欧米のほぼ中間に位置する日本型食生活を実現していたが、近年、油脂類の摂取過多や若い世代での欠食習慣などの問題が発生している。（平成16年度年次経済財政報告、平成15年度図説・食糧・農業・農村白書）

2. 各県の甘藷生産状況の推移

表9によれば、畑面積はこれまでと全く同様に福島、岩手県などが多く、ついで青森県で、宮城、山形、秋田県などはさらに少なくなった。甘藷の作付面積は各県ともに大きく減少した。とくに、岩手県は昭和55年（1980）以来わずか0.1%であったが、さらに平成11年（1999）以来0%となった。青森県では昭和45年（1970）以来0%となっている。しかし、いずれもわずかな栽培は行われている。

千葉県は10a当たり収量と福島県との比較では、これまでと同様に千葉県の60～70%に

しかない。甘藷栽培は全く適地のみにわずかに栽培されるようになった。

主産地は前章に記載の通りである。

(1) 品 種

この時代の準奨励品種は表10の通りである。

3. 各県の甘藷栽培

以下アンケート結果を主体に述べる。なおアンケート回答の機関と市町名、並びに甘藷

この表によれば、宮城、山形、岩手などの各県では準奨励品種として、昭和60年

表 9 平成初年から16年代の甘藷生産状況の推移

(単位:面積ha,収量kg,作付率%)

県 別	調査項目\年次	平. 2.	5.	8.	11.	14.	16.
福島県	畑面積:A	67000	61600	50300	48000	45900	45500
	甘藷作付面積:B	215	178	137	133	112	96
	10a当収量	1510	1320	1600	1540	1700	1620
	作付率 B/A	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.2%	0.2%
宮城県	畑面積:A	30500	29700	26900	27200	26200	26100
	甘藷作付面積:B	68	62	56	50	48	47
	10a当収量	1240	976	1300	1390	1390	1420
	作付率 B/A	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%
山形県	畑面積:A	31400	30200	28300	27000	25400	26000
	甘藷作付面積:B	123	107	73	68	61	53
	10a当収量	1290	1220	1240	1250	1230	1350
	作付率 B/A	0.4%	0.4%	0.3%	0.3%	0.2%	0.2%
岩手県	畑面積:A	71600	70600	66000	65500	61700	60200
	甘藷作付面積:B	87	62	47	32	22	17
	10a当収量	1320	920	1180	1330	1380	1390
	作付率 B/A	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%
秋田県	畑面積:A	24600	24100	23500	22500	22000	21300
	甘藷作付面積:B	117	113	109	98	90	78
	10a当収量	1490	1290	1500	1510	1420	1370
	作付率 B/A	0.5%	0.5%	0.5%	0.4%	0.4%	0.4%
青森県	畑面積:A	77200	77600	76300	75700	74700	74200
	甘藷作付面積:B	6	6	4	4	0	0
	10a当収量	1340	1330	1390	1350	920	970
	作付率 B/A	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
千葉県(参考)	10a当収量	2320	2260	2430	2560	2410	2420

(農水省統計情報部『耕地及び作付面積統計』平.2～13.14.16. 『作物統計』平.14.16.

農水省『いも類に関する資料』平. 14.16.)

(1985) 以来、高系14号をあげている。さらに、山形県のみはベニアズマをあげている。アンケート結果では各県ともにベニアズマの栽培が多い。品種の特性は前章を参照されたい。

(2) 育苗の方法

前章に述べたように、各地域の種苗店から毎年約100%が購入されている。種苗店は契約している育苗農家または関東地方から購入

する。ウィルス無病苗の利用はほとんど見られていない。

1本当りの価格は各県によって差が見られるが、およそ10～15円で昭和年代の後期よりいくらか高値となっている。

(3) 整地及び肥料、(4)植付けの方法、管理作業、(5)収穫及び貯蔵、利用及び食生活、これらの項目の解説は、およそ前章と同様であるのでここでは省略する。

しかし表11の農水省の資料による用途別消費状況について説明する。

農家の保有量は、福島県が25～65%と低く、次いで、山形県が60～80%であった。宮城、岩手県などは全年を通じて70～95%と高かった。秋田県は平成11年(1999)までは55～60%であったが、15年(2003)には100%になっている。青森県では生産量が少ない割りに7年までは70%を超えていたが、11年からは15～0%に低下した。このように、市場販売量は福島、山形県などが多く、宮城、岩手、秋田、青森県などでは少なかった。

なお、アンケート結果では、昭和年代の後期と同様に、ほとんど自家食用と記載され、山形県酒田市のみに青果用の記載があった。東北各県に比べて、生産量の多大な千葉県では、農家の保有量はわずか5～6%で、市場販売量ではどん粉用を合わせて、78～86%と高くなっている。

食生活は全国的に均一になり、



上 平畦栽培の植付状況(マルチ栽培、敷わらは雑草防除用)、福島県会津市 小林弥一氏撮影

下 高畦栽培の植付状況(マルチ栽培)、福島県いわき市役所 橋本温子氏撮影

表10 平成初年から15年代の準奨励品種

県 別	年 次	品 種 名
福島県	平.初～16	(高系14号、ベニアズマ)
宮城県	平.初～10	高系14号
	平.初～16	(ベニアズマ)
山形県	平.初～15	高系14号、平成6年よりベニアズマを加えた。
	平.初～16	(紅高系、ベニアズマ)
岩手県	平.初～6	高系14号
	平.初～16	(ベニアズマ)
秋田県	平.初～16	(ベニアズマ)
青森県	平.初～16	(ベニアズマ)

(農水省『いも類の生産流通に関する資料』平.7.8.12、『いも類に関する資料』平.14.15.)

16、なお、括弧内の品種はアンケート結果による。

全く昭和50年（1975）年代と変わらない。

甘藷は一般には、野菜類の一環として自家食用（焼芋、油揚げ、大学芋、スイートポテト）または加工食品としての利用が多くなった。しかし、南九州や関東地方の大産地では、でん粉用、焼酎用などの利用も多く見られている。

要 約

1. 江戸時代

(1) 東北各地への伝播

沖縄本島に伝来以来220年を経過して、初めて文政8年（1825）川村幸八が、千葉から宮城の中田村（現仙台市大田区中田）に甘藷をもたらした。

その後、安政3年（1856）に田中宮門が新潟から山形の西田川郡浦村濱中（現酒田市）に導入した。さらに、奥山長左衛門が同じ砂丘地帯（酒田市）に伝えた。もともと、甘藷栽培上の気象条件が不良であることや、優良品種がなかったことなどから、うまく定着しなかった。

(2) 政治経済、農業情勢、世相

徳川家康が開いた江戸幕府が約260年続い

た。この間にしばしば凶作・飢饉が生じ、東北地方にも大被害をもたらした。残念ながら甘藷の普及はまだであった。

(3) 栽培方法

品種については明らかな記録がないが、関東地方から導入された吉田、上総白藷系統、相州白藷系統、晩生種藷、紅赤種

系統、屋久島藷などが栽培されていたに違いない。栽培法について秋田県の児玉伝左衛門が纏めた農書『試験田畑』によれば、種藷の貯蔵がうまくいかず、毎年越後国（新潟県）から送付を受けていたが、天保4年（1833）の大凶作に種藷が全て盗まれて以来、甘藷の試作は行っていない。と述べている。

2. 明治から大正時代

(1) 政治経済、農業情勢、世相

明治2年（1869）新政府によって、日本はほぼ統一された。明治38年（1905）には東北地方に凶作が襲い農民を飢饉に陥れ、その悲惨さは天明の飢饉に比されるものであった。大正7年（1918）富山県に発生した米騒動はたちまち全国に広まった。

(2) 生産状況の推移

明治16年（1883）からの統計資料がある。甘藷の栽培面積は、福島県が最大で、明治初期より大正時代（1920）には約7倍に増加した。北部では面積が少なく、青森県では明治35年（1902）まで零であった。

(3) 栽培方法

農業試験場で各種の試験が開始され、多く

表11 平成4年から15年時代の甘藷用途別消費状況

(単位:量目トン、比率%)

県別	項目\年次比率	平. 4.	比率	7.	比率	11.	比率	15.	比率
福島県	生産量	2,770	100%	2,488	100%	2,050	100%	1,360	100%
	農家保有量	674	24%	789	32%	794	39%	878	65%
	市場販売量	1,957	71%	1,525	61%	1,051	51%	374	28%
	減耗	139	5%	174	7%	205	10%	108	8%
宮城県	生産量	898	100%	747	100%	695	100%	576	100%
	農家保有量	701	78%	528	71%	605	87%	550	95%
	市場販売量	2	0%	144	19%	21	3%	23	4%
	減耗	195	22%	75	10%	69	10%	3	1%
山形県	生産量	1,390	100%	1,000	100%	850	100%	735	100%
	農家保有量	960	69%	808	81%	666	78%	455	62%
	市場販売量	347	25%	127	13%	141	17%	243	33%
	減耗	83	6%	65	7%	43	5%	37	5%
岩手県	生産量	785	100%	522	100%	426	100%	251	100%
	農家保有量	736	94%	486	93%	384	90%	223	89%
	市場販売量	10	1%	11	2%	21	5%	14	6%
	減耗	39	5%	25	5%	21	5%	14	6%
秋田県	生産量	1,730	100%	1,570	100%	1,480	100%	1,140	100%
	農家保有量	946	55%	878	56%	877	59%	1,138	100%
	市場販売量	673	39%	590	38%	503	34%	2	0%
	減耗	111	6%	102	6%	100	7%	0	0%
青森県	生産量	82	100%	55	100%	54	100%	0	0%
	農家保有量	60	73%	42	76%	8	15%	0	0%
	市場販売量	17	21%	10	18%	46	85%	0	0%
	減耗	5	6%	3	5%	0	0%	0	0%
千葉県	生産量	170,900	100%	156,200	100%	156,200	100%	133,700	100%
	農家保有量	10,130	6%	9,032	6%	8,227	5%	7,627	6%
	市場販売量	134,010	78%	123,209	79%	133,015	85%	115,100	86%
	でん粉用他	10,690	6%	12,088	8%	11,314	7%	8,439	6%
	減耗	16,070	9%	11,871	8%	3,644	2%	2,534	2%

農水省『いも類の生産流通に関する資料』平. 6. 10. 12.、『いも類に関する資料』平. 16.)

注1:農家保有量は食用、飼料用、種子用などである。

注2:市場販売量はほとんど県内のみであった。しかし、千葉県は県外も多かった。

注3:甘藷は低温(8℃以下)で腐敗し易いために減耗が多い。

の品種が栽培された。育苗は踏込み温床であったが、4～6割の苗を関東地方から購入した。大正時代から化学肥料が伸びたが、一般には自給肥料が使用された。

植付けは麦間または麦の後作とした。畦幅約60cmに株間約30cmにして、5月下旬～6月中旬に斜植えにした。収穫は10月上～中

旬に鎌で行った。約7割を食用にし、2割が種藪用、1割を食用にして貯蔵した。貯蔵は屋内の床下、または屋外に溝式、横穴式でおこなった。

3. 昭和初期から終戦(昭和20年)時代

(1) 政治経済・農業情勢・世相

昭和5年(1930)に世界的な大恐慌が発生した。農村にも深刻な影響を与えた。6年(1931)と9年(1934)に東北地方に冷害による大凶作が生じ、農村恐慌となった。20年(1945)8月15日に、昭和6年(1931)に始まった満州事変以来の「15年戦争」は日本の敗戦によって終結した。戦後の国民生活は苦しく深刻であった。

(2) 生産状況の推移

明治・大正時代よりは増加し、さらに、昭和初期(1926)より20年(1945)は食糧補充のために2～3.5倍に増加を重ねた。しかし、10a当りの収量は千葉県の50～60%にしかならなかった。やはり、東北地方の栽培は気象条件の不利から無理であることが理解される。

(3) 栽培方法

この時代の品種には、花魁、紅赤、千葉赤、金時、白源氏などがあった。育苗は藁囲いの温床で行われた。種藷の貯蔵や育苗の未熟により、苗の4～6割が埼玉県や千葉県などから購入された。植付けは、麦間または裸地に約15cmの高畦を作り、畦幅約60cmに株間約30cmに行った。肥料は自給肥料が主であった。収穫は10月中～11月上旬に行った。約7割を食用にし、約3割を貯蔵した。秋田県では19年(1944)に縦穴式の屋外貯蔵方式を確立した。

4. 昭和20年(戦後)～40年時代

(1) 政治経済、農業情勢、世相

戦後の国民生活は非常に苦しく戦争の傷跡は容易に回復しなかった。25年～28年(1950～53)の朝鮮戦争の特需景気で息を吹き返し、30～32年(1955～57)には「神武

景気」と呼ばれる大型景気を迎えた。さらに30年(1955)以後米の大豊作により食糧需給は好転した。食生活も豊かになり、日本人の体格はいちじるしく向上した。

(2) 生産状況の推移

甘藷の作付け面積は、食糧需給の好転とともに35年(1960)以降には減少し、40年(1965)には、戦後の22年(1947)より60～70%に減少した。

(3) 栽培方法

多くの育成品種が栽培され、その中から岩手、山形県などでは奨励品種が定められている。各県農試で、育苗に電熱温床、ビニール利用の簡易育苗、種藷の温湯消毒などが行われた。農家では、やはり苗の購入が行われていた。

30年(1955)ころからテラー型耕うん機が普及し主要畑作物の機械化体系の研究が行われ始めた。利用は殆ど自家食用である。

5. 昭和40年代後半から60年時代

(1) 政治経済、農業情勢、世相

日本経済は高度成長を続け、国民総生産は43年(1968)にはアメリカに次ぐ第2位の規模に達した。農耕の機械化と農村生活の近代化が進んだ。

米を例外として日本の食糧自給率が急激に低下した。日本経済は54年(1979)からは安定成長の軌道に乗った。高度成長の裏面に、交通事故が急増し、公害や環境破壊問題が深刻となった。

(2) 生産状況の推移

甘藷の作付け面積は食糧需給の好転に伴って各県とも大きく減少した。63年(1988)には45年(1970)より30～36%に減少した。

(3) 栽培方法

この時代には各県ともに、農林1号、高系14号、紅赤、ベニコマチ、紅農林などの食用品種を奨励品種または準奨励品種にしている。育苗は行わず、90～100%が種苗店から購入された。他の作物との併用によりトラクタの利用も見られるようになった。高畦栽培のほかに平畦栽培も行われ、なおマルチ栽培が行われはじめた。農水省の資料によれば、案外に福島、山形県などでは市場販売量が高く、他の県では自家保有量が高かった。アンケート結果では、各県ともに自家食用と記載されていた。

6. 平成初年から16年時代

(1) 政治経済、農業情勢、世相

平成15年（2003）度の経済成長率は3%を上回り、失業率は13年ぶりに前年度から低下した。食糧自給率は14年（2002）度には40%まで低下した。近年若い世帯での食習慣に問題が生じている。

(2) 生産状況の推移

甘藷の作付面積は各県ともに大きく減少した。岩手県は11年（1999）以来、青森県は昭和45年（1970）以来0%となっている。しかし、いずれもわずかな栽培が見られている。

(3) 栽培方法

宮城、山形、岩手などの各県では、昭和60年（1985）以来準奨励品種として高系14号をあげ、さらに山形県のみはベニアズマもあげている。アンケート結果では、各県ともにベニアズマの栽培が多い。苗の購入、整地及び肥料、収穫及び貯蔵、利用及び食生活などについては、およそ前記と同様である。農

水省の資料によれば、案外に福島県の市場販売量が高かった。他の県では自家保有量が高かった。しかし、アンケート結果では、各県ともに自家食用と記載されていた。

引用文献及び資料

- 日本甘藷馬鈴薯株式会社 1948. さつまいも及びじゃがいもの渡来 新生社
- 小林 仁 1986. サツマイモのきた道 古今書院
- 宮本常一 1962. 甘藷の歴史 未来社
- 山形県砂丘地農試 2004. 砂丘地農試70年のあゆみ
- 農林省農務局編 1937. 雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱（全国）大日本農会
- 石井進他 1999. 詳説日本史 山川出版社
- 児玉幸多編 1955. 標準日本史年表 吉川弘文館
- 宮城県田尻町 1982. 田尻町史 上巻
- 長谷川浩他 1955. 甘藷の生育と地温との関係 九州農研16
- 千葉県 1968. 千葉県甘しょ発展誌
- 中馬克己 2002. 日本甘藷栽培史 高城書房
- 児玉伝左衛門（佐藤常雄訳） 1851. 試験田畑 日本農書全集61（1994） 農文協
- 福島県会津若松市 1967. 会津若松市史 7巻
- 福島県福島市 1974. 福島市史 第4巻
- 農林水産省統計情報部 1983. 都道府県農業基礎統計（明. 16. ～昭. 55.）
- 福島県農試 1935. 昭和8年度 業務年報
- 東畑精一編 1953. 牛馬耕の分布 日本農業発達史 1 中央公論

宮城県田尻町 1983. 田尻町史 下巻
 小野武夫 1942. 明治時代の火耕 日本農業起源論 日本評論社
 福島県相馬市 1975. 相馬市史 3巻
 黛弘道他 2001. 詳解日本史 清水書院
 坪井洋文 1999. 民俗学から見た穀類とイモ 日本の食事文化 2 味の素
 秋田県農試 1971. 秋田県農試70年史
 福島県二本松市 1986. 二本松市史
 農文協 1984～90. 東北各県の食事 日本食生活全集 2～7
 福島県農試 1931～40. 昭和5年～15年度業務年報
 福島県農試 1952. 昭和23年～24年度業務年報
 福島県農試 1957. 福島県農試60年史
 宮城県農試 1946～58. 宮城県農試 昭和21年～30年度 業務年報
 山形県農試 1952. 山形県農試年報 砂丘地分場の部
 山形県農試 1977. 山形県農試80年史
 岩手県農試 1949及び54. 岩手県農試 昭和24年～30年度 業務年報
 岩手県農試 1951及び71. 岩手県農試50年史、70年史
 秋田県農試 1973. 秋田県農試技術80年の歩
 農林省農業改良局 1955. 甘藷直播栽培に関する研究
 豊川裕之 1999. 昭和の食の変遷 講座食の文化 2巻 日本の食事文化 味の素
 農林水産省統計情報部 1992～2005. 耕地及び作付面積 平成2年～16年
 農林水産省統計情報部 2003及び05. 作物統計 平成14年及び16年

農水省 1975～83. 甘しょの生産および流通の現状 昭和48年～56年
 農水省 1982～2000. いも類の生産流通に関する資料 昭和57年～平成12年
 農水省 2002及び04. いも類に関する資料 平成14年及び16年
 坂井健吉 1999. さつまいも 法政大学出版部
 土田茂 1997. インスタント時代の食品加工 昭和農業技術発達史 6 農林水産技術情報協会
 経済企画庁 2004. 平成16年度 年次経済財政報告
 農林統計協会 2004. 平成15年度 図説・食糧・農村白書
 中村正則他 2001. 日本史B 日本書籍株式会社
 東北各県の市町及び農試 2005. 『昭和50年～60年代』及び『平成初年～16年代』の甘藷栽培のアンケート、福島県：農試、郡山市、いわき市；宮城県：仙台市；山形県：県砂丘地農試、酒田市、遊佐町；岩手県：県農業センター南部園芸研究室；秋田県：秋田市、由利本荘市；青森県：県農林センター砂丘研究
 (完)

